企画セッション

◆ 映像制作現場における知的財産権のゆらぎ ◆

【概　要】

近年、映像制作現場では権利関係の意識が非常に強くなり、制作者一人ひとりが知的財産権のことを考慮しながら現場での判断を求められるようになってきている。特に報道やドキュメンタリー番組では、制作者が「リアリティ（真実性）」を求めて、著作権やパブリシティ権、肖像権に抵触せずに表現（モザイクをいかにしてかけずにすむか）するかで、ゆらいでいる。画角や尺数、意味合いによって文脈も都度変わってくるため、ケースバイケースとなっているからだ。

本ワークショップ企画では、映像制作者（ディレクター）が制作現場でどのような迷いがあるのか、実際の事例をあげながら問題提起を行う。またテレビ局の法務現場で、近年の映像制作において知的財産権の視点からどのような問題／議論が起こっているのかの報告を行う。そのうえで、映像制作現場で「質」と照らし合わせながらいかにリスクをとっていくのか、法律上の定めと今後の映像制作あり方を考察していく。

【構成】

▼「意図的」な写り込み（写し込み）は、著作権侵害をしているのか、していないのかを判断するのか。

・仮想実例をいくつかとりあげる。
・法律の整理
・法律をいかに解釈するのか
・合法か／違法か／クレームへの対策か／他の方法があるのか

▼「意図的」な写り込み（写し込み）は、どのように肖像権／パブリシティ権を侵害しているのか、していないのか判断するのか。

・実例：韓国アイドルの広告の映り込み／ファンにファンサイトを見せてもらう
・法律の整理
・法律をいかに解釈するのか
・合法か／違法か／クレームへの対策か／他の方法があるのか

⇒広告掲載の意味合いの変容に法律はどう解釈するのか

広告は SNS への投稿を狙ったプロモーション用に掲載されている可能性。（任天堂ではゲーム画面の著作権を一定のガイドラインを守ればフリーとしている）

▼【議論】法律上の定めとこれからの映像制作について

企画セッション

◆ 映像制作現場における知的財産権のゆらぎ ◆

【講演者】

▼木村 浩也（弁理士）

略歴：早稲田大学大学院法学研究科先端法学専攻　知的財産法 LL.M 修了。時事通信社入社、システム局に配属。TBS テレビ技術局で放送システム構築に従事。2020 年より、TBS テレビ　ビジネス法務部に異動し、著作権処理、商標出願に関わる。本報告に関連する業績：「文化庁インターネット上の著作権侵害（海賊版）対策ハンドブック」編集委員（2021）、「AI 音声認識の字幕への活用～TBS の事例～」，映像情報メディア学会誌（2020）5 月号。

▼石井 宏之（弁護士）

略歴：弁護士（第二東京弁護士会）。2015 年に弁護士登録、2019 年に石井・髙畑法律事務所を設立。ミュージシャン、DJ など音楽家向けに無料法律相談サービスを提供する弁護士コレクティブ「Law and Theory」に所属。主に、音楽・映画・アニメ・ゲームなどエンタテインメント法務やベンチャー/スタートアップ企業の法務（ジェネラルコーポレート、紛争対応、M&A 等）を担当。映画監督やデザイナー、アーティストの著作権契約の作成・レビュー、ライセンス交渉などのクリエイター・サポートにも積極的に取り組んでいる。　本報告に関連する業績：『職種別にわかる！フリーランス・トラブル対応の弁護士実務―横断的にみる周辺法令・関連ガイドライン』（第一法規）（クリエイティブ・フリーランスの章を担当）

▼末宗 達行（金城学院大学・准教授）

略歴：2019 年早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程修了。博士（法学）。2015 年日本学術振興会特別研究員（DC1）、2018 年早稲田大学法学学術院助手、2019 年同大法学部講師（任期付）、2021 年金城学院大学講師を経て、2023 年より現職。

本報告に関連する業績：「応用美術の『写り込み』をめぐる一考察（1～2・完）−イギリス法との比較を通じた著作権法 30 条の 2 の解釈の検討−」早稲田法学 97 巻 4 号・98 巻 1 号（2022 年）等

▼淺野 麻由（国際ファッション専門職大学・准教授、映像制作者）（進行役）

略歴：2020 年立教大学大学院社会デザイン研究科博士後期課程修了。博士（社会デザイン学）。2021 年国際ファッション専門職大学専任講師を経て、2023 年より現職。

映像制作者として、企業CMやNHK、民放各局で報道番組、ドキュメンタリー番組を中心に200本以上の映像制作に携わる。第 67 回 広告電通賞【テレビ・飲料部門】優秀賞、第 53 回 消費者のためになった広告コンクール【テレビ 16 秒以上】銅賞、第 23 回 アジア・テレビ賞 社会意識番組部門 最優秀賞、2019年ニューヨーク・フェスティバル　ドキュメンタリーヒューマンコンサーン部門　銀賞、第 56 回 ギャラクシー賞 テレビ部門 選奨。